柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 177 号

臼井義胤翁を訪ねて３

義胤青年の独立

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

明治維新期の混乱の中で　結婚と長子の誕生

義胤青年は古美術商とでも名付けられる商いをいつ頃始めたのか？この点は定かではありません。ただ、義胤青年の肩にのしかかった名門臼井家の再興への道筋に明るさが灯った時期については推測が可能です。明治 7 年(1874 年)30 歳の区切りの年に、嫡男泰胤さんが誕生したことが分かっているからです。泰胤さんの母やす女は、臼井家同様、下総から上総にかけての一帯を支配した千葉氏の一族鏑木家の長女でした。義胤青年は、嫡男誕生に先立って、28 歳～29 歳頃に名門鏑木家の令嬢を娶っているのです。明治の初期は、没落した貧しいままの青年が妻女を持つことなど考えられない時代です。少なくとも妻女を養っていける程度の財を蓄えていたことになります。

義胤青年が幕末の混乱期に画業で身を立てることを諦め、書画骨董の売買を生業とすることを思い立ったことは、前回に記しました。彼がどの時点で下麻生の家を出て、東京に仮住まいするようになったのかは特定できません。幕末から維新の混乱期、まだ東京と名を変える前の慶応年間(1864 年～68 年)に江戸に出て、まずは骨董商に住み込みで働き、美術品を見る眼をさらに鍛え、次第に顧客の信頼を得て、独立への道を開いた。これが当時のサクセスストーリーでした。

オランダ総領事ポルスブルックの富士登山の警護に動員された幕府役人

戊辰戦争に勝利した西南雄藩中心の新政府は、権力基盤を整えるためにまずは、新政府の名での通貨を発行し、その安定を図らなければなりません。通貨が安定しなければ、新政府が国民の信頼を得ることなど不可能だからです。ところが前回記したように大量の金が海外に流出してしまいましたから、新政府は必要な量の金貨の製造が出来なかったのです。含有量を減らせば、物価の高騰は避けられません。そのため、新政府は太政官札という名の紙幣を、貨幣に変わるものとして発行したのです。各地の大名領では藩札が流通していましたから、紙幣への抵抗は少なかったのですが、東京はそうはいきません。1 両の太政官札は、なお流通していた金貨に比べ、半値近くにまで下落してしまったのです。商人たちは太政官札の受け取りを拒否し、貨幣での支払いを求める騒ぎが各地で起きました。騒動が落ち着くのは、明治 2 年(1869 年)の春になって、大隈重信が財務卿に就任し、紙幣の名称を円と定め、1両を1円に固定して貨幣での取引を禁止し、違反者に厳罰を科す荒療治を実行してからでした。政府の強い姿勢が欧米列強の支持を得、横浜、神戸、長崎などでの取引がスムーズに運ぶようになったことから、東京、大阪などを皮切りに円の紙幣は、全国に定着していったのです。

こうした混乱は、義胤青年に飛躍のチャンスを齎します。江戸には将軍に直属する旗本・御家人が 23,000 人ほどとその家族、さらに諸大名の江戸藩邸に暮らす藩士と家族がおりました。将軍家の家臣の内、1 千石以上の大身の旗本は 850 人程度に過ぎず、各藩邸でも 500 石以下の微禄の家臣が大部分を占めていたのです。当然彼らの暮らしは貧しく、生活は厳しかったのです。そこに開国後の社会的混乱と物価の変動が降りかかります。幕府の統制力も弱まる中、整えていた装備や家財などの内、良い値で売れそうなものは手放す小禄の武家が万を超したのです。

義胤青年は美術品を見る眼を生かし、さらにひたむきに研鑽を積み、まずは部屋住みの侍らが捌きたい品物、数枚の浮世絵、印籠や刀の鍔などを、外国人に売り込む橋渡しをすることで信用を得、その口コミで部屋頭やさらに上司の中小旗本から屏風や掛け軸など、利幅の大きな品を商品として扱えるようになり、美術品中心の骨董店主として独り立ちすることが出来たのです。平安朝末期からの名門臼井家の再興に黙々と歩み続ける義胤青年のこうした姿に好感を抱いたからこそ、臼井氏と同じく名門千葉氏の一族である鏑木家の当主祚胤氏は、大事な娘を嫁がせたのでしょう。

続　く

シリーズ
麻生区の地名　その2

王禅寺の地名

菊地恒雄（日本地名研究所　研究員）

歴史ある王禅寺を考えるとき、王禅寺という寺院と王禅寺村を分けて考える必要があります。

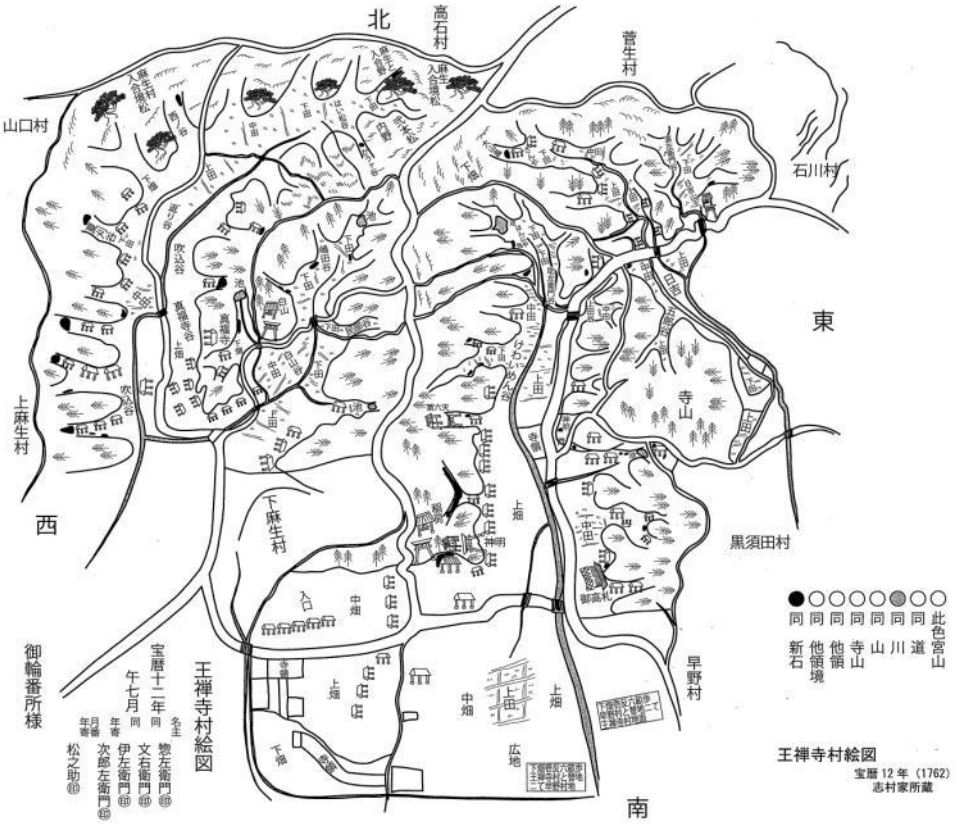
王禅寺は戒律を厳守し厳しい修行者のための寺院として存在しました。現在は新義真言宗の寺院ですが、古くは久良岐郡金沢称名寺の末とありますから、真言律宗の寺で禅・律・真言の三宗を兼学したとあります。寺中には 5 塔の塔頭がありました。金剛院・持明院・等持院（東持院）・宝憧院・蓮乗院があり、それぞれの僧坊で修業しており、このことからも多くの僧が修行に励んでいたことが想像されます。

前号にも書きましたが、王禅寺領として麻生郷とは別に所領を安堵されていました。寛永 19 年（1642）に寺領 30 石の御朱印を賜っています。いつの頃か当山を人々は関東の高野山と称するようになったといいます。これも奥深い山々に囲まれたこの地を形容する言葉になったと思われます。

一方、王禅寺村は大きく二つの川によって分けられています。東の王禅寺のある谷が早野川で、西の谷に真福寺川が入り込んでいます。王禅寺谷（おうぜんじやと）と真福寺谷（しんぷくじやと）とも呼ばれています。王禅寺村の一部が江戸のはじめに二代将軍秀忠の御台所（みだいどころ）の御化粧料の地となり、化粧面（免）の地名があります。寛永 9 年（1632）に王禅寺村は増上寺領となり、17 世紀半ばに出された『武蔵田園簿』には「増上寺領王禅寺村高 192 石、花蔵院（王禅寺）領高 30 石」と載っています。般若面の面は免田のことで、王禅寺の維持費に当てる土地のことで、他にも油免の地名があり、王禅寺か増上寺の灯明料に宛てた土地のことです。

真福寺は王禅寺の門徒寺でしたが、寺領をめぐってしばしば訴訟をおこすなど、維持管理に苦労したようで、明治初年に廃寺となり、地名のみが伝えられています。白山神社の近くにありました。王禅寺の北東の位置を日吉谷（ひよしやと）といいます。通称地名に日吉の辻があり、日吉山王社の小祠があったところからの地名といわれますが、広大な地です。日吉山王社は天台宗の比叡山延暦寺につながる、日枝神社を勧請した神社で、菅生の稗原も一説には日枝ノ原に因む地名と考えることもできます。

東柿生小学校の校地のある付近を荒立野（あらたつの）といいます。王禅寺もはじめはこの地にあったともいわれてきました。学校を立て替えるにあたり、発掘調査を行ったところ、複数の遺跡が発掘され、そのことが証明されました。荒は「現れる」の意味を持ち、荒の字を宛てたものです。真福寺谷の北に位置するのが、光かゞ谷（ひかりかがやと）で、明治になって光ヶ谷（こうがやと）と改称しています。この地から王禅寺に安置される小観音が掘り出されたことによるとされています。この観音様が光り輝いていたところからの地名といいます。入口は王禅寺に入る口にあたるところで、高札場がありました。早野川に石橋が架かり、角には石仏群が安置され、結界の場所であったことがわかります。真福寺側からは表谷戸とよんでいたといいます。



王禅寺村絵図（トレース地図）

琴平神社のある付近を志村谷（しむらやと）といいます。名主志村家をはじめ志村姓が多いところからついた地名です。名主志村家は稲毛の増上寺領の総支配で、訴訟等の文書を取りまとめて、目黒にあった増上寺領の役所に提出する役目を負っていました。琴平神社は江戸時代までは神明社といい、今は分社となっているところにありました。江戸後期に名主志村文之丞により、讃岐の金比羅大権現が勧請され、椙殿に配置しました。明治以降琴平神社に改称し、拝殿を現在の地に遷宮して、現在に至っています。

シリーズ
教育の歩み　番外編

ゆとりの教育をめぐって（３）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

「ゆとりの教育」という言葉が独り歩きしてしまったために、知識重視型の教育から思索重視型教育へという本来の狙いから離れた議論が主流になってしまったことは悲劇でした。知識重視の詰め込み教育のままでは、壁にぶち当たった日本社会の未来を切り拓く人材は育てられない。この現実ははっきりしていました。だからこそ思索重視型教育への転換が構想されたのです。それは、児童・生徒、特に中学校や高等学校の生徒に対する猛スピードでの教え込み教育をやめて、教育内容を絞り込み、学んだことを考え抜いて、しっかり理解する時間を確保することを狙った改革でした。膨らみすぎた教育内容をふるいにかけ、必要なものだけを残す教育内容の精選が欠かせない課題でした。この作業にはかなりの時間が必要です。また、厚くなる一方だった教科書をすべて終えるために、反復学習を重視せずに先へ先へと授業を進めることに慣れた教師に、理解重視教育への転換を促すには、時間をかけた説得と教師自身に再学習の機会を提供し、学び直してもらう時間を確保することが必要でした。しかし、文部省は導入を急ぎました。

さらに、同じように詰め込み教育の下で育った保護者やマスコミの説得も必要でした。彼ら彼女らは、ゆとりの教育というネーミングに踊り、ゆとりの教育＝授業時間の削減＝学力の低下と、短絡的に思い込み、詰め込み教育への回帰を主張したのです。授業時数を増やせば、成績が向上するわけではないことは、前号の最後に記した通りなのですが…。

日本でも授業五日制をとっている学校は、ミッション系の私立学校を中心に、古くから存在していました。日曜礼拝への生徒の出席を促す必要から、土曜日を休業日としていたのです。こうした学校で、父母から学力低下を心配する声が上がったという話は聞こえてきません。教師たちが丁寧な指導を心がけ、時間外にいくらでも生徒たちの質問を受け付ける体制を整えており、土曜日も質問日として、質問したい生徒が自由に登校できるようにしていたのです。さらに、単元の終了ごとに豆テストを実施しては、理解の遅れている生徒、躓いている生徒を見つけて、個別に指導する体制も整えていました。

さらに、授業五日制を導入した場合、授業のない日、登校しなくて良い日を土曜日に限る必要はありません。土曜日は半ドンですから、削減する時間数は少なくて済みますが、月～金の平日のどこかを授業のない日とすることも可能です。実際に昭和女子大学の附属中学校と附属高等学校は、水曜日を授業のない日とした五日制を実施しています。土曜日には学習の定着度を測る各教科の豆テストを行い、一週間の授業の定着度をチェックするのです。生徒一人一人について理解が十分か否か、不十分とすればどこで躓いているかをはっきりさせ、当該生徒に伝えて、翌週の水曜日までに学び直しが出来るようにしたのです。さらに、授業のない水曜日も、専任教員は全員出校して、自主登校してきた生徒たちの質問を受ける仕組みになっているのです。週の真中に授業のない日を設けることで、生徒たちは月曜と火曜の授業を振り返って、分からなかったことがあれば、教科担当の先生に再度の教えを乞うたり、質問したり出来るのです。この措置を導入したことで、同校の授業の定着度は大きく改善し、学力不振で学業を放棄する生徒は限りなくゼロに近づいたと言われています。

ゆとりをもって学ぶことには、大きな利点があるのです。それはとりわけ、直感的に物事を捉えること（私は直線的、垂直的理解力と名付けています）を苦手とし、腰を据えてじっくり考える（螺旋階段式理解力）ことで納得するタイプの生徒たちの能力を大きく開花させることに繋がります。いわばこれまでの、知識重視型の詰め込み式教育では、埋もれたままで放置されがちだった大器晩成型の人物を発掘することになるのです。じっくり考え、しっかり納得して理解したことは、単に覚えたこととは違って、応用が利きます。従って従来とは異なる局面に出会っても、脳に蓄積した様々な知識を動員して新たな知見に至る可能性も持っているのです。現在必要とされている人間像は、過去に例のあることには強くても、まったく経験のない事態には立ち往生してしまうタイプの人物ではないのです。

個人差はありますが、人の脳が記憶できる量には、必然的に限度があります。従って中間試験や期末試験、或いは入学試験などで、あれもこれもと詰め込んだ知識は、試験後しばらくすれば、かなりの部分が抜け落ちてしまいます。次の試験で覚える必要のあることが詰め込めるように、記憶脳の一部を空けておく必要があるからです。他方、単に覚えたのではなく、何故そうなるかをしっかり理解し、論理的に因果関係を把握したことは、記憶の襞にしっかり染み込んで忘れずに脳に残ります。20世紀の90年代以降、必要とされている教育は、生徒たちに腑に落ちるまで考える時間を確保し、考え理解する楽しさを伝える思索型の教育だったのです。

続　く

柿生・岡上の
地域文化財

王禅寺（1）琴平神社の「手水舎」

琴平神社　宮司　志村幸男

手水舎（てみずや、ちょうずや）は神社、仏閣、又他の施設の入り口にあります。

参拝の際に、知らず知らずの内に受けてしまった身の穢れ（けがれ）をお清めする目的で水を流し、又溜めて手や口を濯ぐ建物です。

当琴平神社の手水舎は石水鉢を「がまんさん」と呼ばれる 4 人の山伏が支える珍しい形態で、令和 4 年 10 月 5 日、川崎市の地域文化財に指定されました。

手水舎でのお清めの作法は、まず心を静め一礼をして、柄杓を右手で持ち水を汲み左手に水をかけ、次に柄杓を左手に持ち替え右手を清める、さらに右手に柄杓を持ち替えて水を汲み左手に受けた水で口を清め、次に柄杓を立て、柄を清め、元の場所へ戻し、軽く礼をして参拝場へ向かいます。水の出しかたは竜の口から出ている所、滝となって出ている所、石鉢の下から湧き溜めている所と様々です。コロナ禍の中では感染予防の観点から、人感センサー付きの手水舎が出て来ました。

手水舎の呼び方は様々で「ちょうずや」「ちょうずしゃ」「てみずや」「てみずしゃ」などと呼ぶところがあります。他にも水盤舎（すいばんしゃ）、御水舎（おみずや）などと呼ぶところもあります。手水舎の言葉は「てみず」→「ちょうず」と変化したものと伝えられています。

手水舎を「ちょうずや」とは、なかなか読めません。呼び方は神社・仏閣の施設、他の施設で地域差があり、南東北地方では「ちょうずや」、関東では「てみずや」と呼ぶことが多いようです。手水舎の「舎」は、建物「屋」と理解できます。水を溜める所を、風雨から守る建物を言い、「てみずしゃ」「てみずや」と呼ばれるのはこの事からです。

手水の歴史は古く、一説では、神聖な地を踏む前に、河川海などで身を清める「禊」（みそぎ）とする説があります。日本最古の歴史書「古事記」に記された国生みの物語に登場する「伊邪那岐命（いざなぎのみこと）」と「伊邪那美命（いざなみのみこと）」は、日本最初の夫婦としての高天原の神様ですが二神様が国を生む際、最後に火の神をお生みになったことで伊邪那美命が亡くなり、黄泉の国に行ってしまい、その後を追った伊邪那岐命が死の世界の穢れを受けてしまう、その穢れを祓うため、河川に入り「禊」（みそぎ）をしたことからの習わしと伝えられています。

人は、日常生活の中で知らず知らずのうちに罪・穢を受けてしまいます。神拝に際してはこれらの罪穢を清め祓い、清らかな本来の姿に戻し、大前に額づき御神徳を賜ります。

吉田松陰は「神は清浄なるを好み、神を拝むには、先ず己が心を正直にし、又己が体を清浄にして外には何の心もなく、ただ慎み拝むべし」と遺しています。

日本人はお風呂が好きと言われておりますが、これは単に清潔好きからだけでなく「禊」の習いから来たものと思われます。例えば、伝統的な日本家屋の玄関先などには「蹲（つくばい）」という石をくりぬいた手洗場があり、これもお清めの伝統の一つです。

清浄を好む伝統を重んじ、コロナ禍の中、手を洗い、口を漱ぎ、ウイルスを避け、御健勝でありますよう、ご祈念申し上げます。

柿生郷土史料館催物案内　【参加自由、入場無料】

◎開　館　日：２月11･18･25日（毎土曜日）　　3月5･12･19･26日（毎日曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時（緊急事態宣言等発令の場合は休館となります。）